

令和4年度第1回葉山町総合教育会議 会議録

- 1 開会年月日 令和4年7月19日(火)
- 2 開会場所 保育園・教育センター 会議室
- 3 出席者 町長 山梨崇仁
教育長 稲垣一郎
教育長職務代理者 小峰みち子
教育委員 鈴木伸久
教育委員 下位勇一
教育委員 清水衣里
- 4 出席職員 教育部長 田丸良一
教育総務課長 虫賀和弘
学校教育課長兼教育研究所長 濱名恵美子
生涯学習課長 中川禎久
政策課長 佐野秋次郎
長柄小学校長 益田孝彦
南郷中学校長 森岡 孝
長柄小学校教諭 水木裕介
南郷中学校教諭 河野紘典
- 5 議長 町長 山梨崇仁
- 6 書記 教育部長 田丸良一
- 7 開会 午後2時00分
- 8 閉会 午後4時11分
- 9 協議事項 (1) 葉山町立学校におけるICT活用の実態と今後の展望
(2) その他

(開会宣言)

教育部長) ただいまから令和4年度第1回葉山町総合教育会議を開会いたします。
時刻は午後2時ちょうどです。

総合教育会議は、町長が会務を総理することとなっておりますので、これ以降の進行は山梨町長にお願いいたします。よろしくお願ひいたします。

町長) 改めまして、皆さん、こんにちは。よろしくお願ひいたします。それでは、本日の会議に入りたいと思いますが、初めに傍聴人の方がお1人いらっしゃることをご

報告させていただきます。

本日は、長柄小学校 益田校長及び南郷中学校 森岡校長がオブザーバーにて出席をしております。

本日の協議事項は、次第のとおりでございます。協議事項につきましては2点ございます。

(葉山町立学校におけるICT活用の実態と今後の展望)

町長) それでは、協議事項に入ってまいりたいと思います。(1) 葉山町立学校におけるICT活用の実態と今後の展望についてでございます。

初めに、葉山町立学校におけるICTの推進指針について、説明をお願いしたいと思います。では、瀨名課長、お願いします。

学校教育課長) それではよろしく願いいたします。

まず、葉山町立小・中学校の現状について少し触れさせていただきます。国のGIGAスクール構想によって、本町においても、令和3年度から全ての児童・生徒に1人1台端末の貸与を実現しております。今年度で2年目に突入いたしました。小・中学校ともにタブレットを先生方が当たり前のように使用して、日常的に授業の中でICTを活用する光景を目にすることが多くなりました。授業における活用状況につきましては、この後、2人の先生方にICTを活用した授業実践の具体的な報告がございますので、ご期待ください。

それでは、葉山町立学校におけるICT推進指針の概要について、簡単に触れさせていただきます。内容等につきましては、昨年度3月の定例教育委員会においてご説明させていただきましたので、ここでは簡単におさらいをさせていただきます。

内容につきましては、目次に書いてございますが、第1章から第5章の5部構成になっております。第3章の教育の情報化に関する取組については、一番内容が厚くなってございまして、ICTを活用した教育内容に関わるソフト面の部分と、それからICTに係る環境整備のハード面の両側面から記載をさせていただいております。ただし、この内容的には、まだまだ改善の余地がございまして、不十分な点も多くございます。特に教育内容の側面におきましては、ICTを活用する教員の指導力の格差の問題、それからその格差を埋める研修体制をどのように充実していったらいいかという課題、それから家庭との連携やAIドリル、デジタル教科書等、今後検討していかなければならない課題が多く挙げられてございます。

また、環境整備面におきましては、端末の今後の更新の仕方、Wi-Fi回線の速度の部分を含むネットワーク環境の再構築、それから校務の情報化などについて

も、ソフト面と同様に今後の検討課題となっております。

これらにつきましては、本冊子の第4章に「取組の推進のために」という文言を記載させていただいておりますが、今年度から葉山町ICT推進会議というものを構成いたしまして、年度ごとにその進捗度合いや方針等を検討することになってございます。この会議のメンバーにつきましては、県教育委員会の総務室のICT推進グループのご担当者、それから民間の有識者、さらには地域のICT関係者の有識者として、本委員でもあられる下位委員をお招きいたしまして、会議を開催いたします。第1回目の会議を7月25日に開催する予定でございます。下位委員、引き続きどうぞよろしく願いいたします。

以上、本指針につきましては、葉山町立学校のICTの目指すべき方向性を示していけるように、また都度バージョンアップを図っていく所存でございますので、どうぞよろしく願いいたします。概要については以上でございます。

町長) ありがとうございます。コメントしますと、2年前ですね、今ごろ突如GIGAスクールという話が出てきまして、私も予算を預かる立場でありますけれども、葉山の子どもたちみんなにタブレットを渡そうと。すごい構想でありながら、もはやそれが当たり前の時代に、この2年間、コロナの間もありましたけれども、進みました。まず、この町のICTの推進指針として定めていただきまして、時代の波に乗り遅れないどころか、時代をなるべく先駆的に捉えてですね、葉山町らしい教育の実践に向けてということでもまとめておりますけれども、皆さんからこの点で質問とかご意見がありますでしょうか。

小峰委員) 私たちは概要は前にも説明していただいたんですけれども、少し、皆さんに知っていただくために、あえて質問させていただきます。GIGAスクール構想の中で、最も大事な言葉として、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを保障する。そのためにICTを積極的に活用するということがあります。具体的に、教育委員会としてどのようなものをイメージすると、誰一人取り残さないとか、それから公正な個別教育…個別に最適化された学びになるということを念頭に置いて、各学校で推進していただこうとしているのかというところ、できるだけ具体的に教えていただきたいんです。教職員たちの働き方改革は、かなり具体的にイメージできるんですけど、学び方になると、なかなかその辺の具体的なイメージというのが出てこないかなとは思っているので、もしお願いできるなら、その辺を教えていただきたいと思います。

学校教育課長) 今の質問についてですけれども、まずICTを活用する以前に、これからの目指すべき授業として、主体的・対話的で深い学びということが言われています。その

根源となるものは、全ての子どもたちが分かりやすい授業構成をするということが一番大切な要素になるかなと思います。そういった授業を行っていく上で、このICTの活用というのも一つの手段、ツールとして活用することで、より分かりやすい授業をつくっていくことが大前提となります。

具体的には、多様な支援や対応がさらに求められている今、まずは視覚的に分かりやすい提示の仕方は何だろうか。耳から入る情報についても、どういう言葉で、どういう入り方で先生方が言葉選びをすればいいのか。あるいは子どもたち同士で対話がなされればいいのかということを、視覚や聴覚に訴えかけ、いろいろなものを織りまぜながら、分かりやすい授業というものが目指されるべきところです。

そういったところで言うと、個別最適化の学習を進める上で、ICTを有効活用することは大きな手段の一つです。今まで一斉授業の中で教員が課題を提示し、机間指導であったり、一人一人への声掛けによって知識を深めることが主流でした。しかし今は、子どもたちがそれぞれの理解度に応じて学習が進められるように、ICTを活用した学習を行えることで指導の個別化が容易になります。先ほど私が申し上げた課題の中にAIドリルの導入がありますが、それぞれの子どもたちが理解度に応じて端末も活用しながら学習を進められていくということも、個別最適化の学習の一つにつながります。

ですので、そういった教員が行う授業と、端末を使いながら授業を行っていくベストミックスというような言い方をしますけれども、双方を融合させた授業を進めていくことが、それぞれの子どもたちに応じた授業づくりにつながっていく一助になると考えているところです。

小峰委員) ICTを活用すると個別化が進むということの以前に、子どもたちがそういうものを使いこなせる、あるいは先生方が使いこなせないといけないわけですが、委員会から「情報教育の全体計画」細かいのが出されていて、大変参考になります。この学年だとかいうような技能を有するようになるとか、こういう使い方ができるとかということが示される「葉山町版 情報活用能力段階別学習内容表」の中身は、見方を変えて評価規準になると言っているのかどうか分かりませんが、教員が教える場合には自分の指導がどれだけできたかという、自分に対しての評価になるだろうし、子どもがどのくらい力をつけたかという評価にもなるので、学習内容表を基にした評価基準みたいなものが出てくると思うんですね。こういうものをもとにして、1、2年生だったらこのくらいの活用ができるようになってほしいという願いを、目標を持って、ICTの活用を先生方が指導しているわけですね。基本的な操作とか、情報のモラルとかというものも、指導内容としてどんどん出てくると

思うんですけれども、これらをもとにして各学校では指導の基準に達成できない子がどういう状況にあるかを知ることが大事だと思うんですけれども、そういう基準はそれぞれの学校でつくった上で、取組を進めていくようにお考えになっているのかなと思うんですけれども、その辺りはいかがでしょうか。

学校教育課長) この指針を作成するに当たり、各学校のICT推進を担当する先生方にも中身を検討していただきました。この指針の最後につけている19ページからになりますが、葉山町立小・中学校の情報教育の全体計画を作成させていただきました。これは各学校の先生方と共に、小学校1年生から中学校3年生までの9年間、どのように情報活用の力を積み重ねていくかという指導内容等を、先生方と相談しながら策定させていただいたところです。

このICTの活用に限った話ではありませんが、小学校1年生から中学校を卒業する9年間、どういうふうに学習を積み重ねていくかというところがとても大事なところになります。こういった全体計画を各学校に落とし込み、先生方がどのように活用するかというところが非常に大切になってきます。このICT活用の全体計画もなかなか学校に落とし込めていないのが現実課題としてございます。

併せて、委員のご指摘のとおり、どういうふうに評価をしていくかというところも、まだまだ検討課題がございます。こちらの全体計画をたたき台にしながら、この中身についても先生方と共にバージョンアップを図っていく必要がございまして、指導と評価の一体化ということで考えると、評価の部分がまだまだ不十分なところがございますので、学校がより活用しやすいものにバージョンアップしていきたいと考えております。

町長) この後、現場の先生方の授業の実践報告もありますので、それを受けた上で、また後ほどお時間とあればと思いますが。ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、今日は河野先生と水木先生にお越しいただいておりますので、現場の授業の実践について、ICT活用の実践報告をお願いしたいと思います。

それでは初めに長柄小学校の水木先生から、よろしくお願いします。

水木教諭) 改めまして、こんにちは。私は長柄小学校の水木と申します。本日はこのような場で発表させていただけることを光栄に思っております。学校の教育活動の一部ですが、少しでも取組や課題についてお伝えできればと思っております。よろしくお願いします。

本日の議題は「ICTの活用の授業実践から見えてきた総合的な学習の時間の課題と展望」という題で発表させていただきます。お願いします。

まず、これまでの学習について振り返りたいと思います。これまでは教師が学習の中心になって進める教師主導の授業や、全員が同じ時間に同じやり方で、同じことを行う一斉授業。そして、教師から児童・生徒に一方的に教示する受動型の授業が行われてきました。そして、2020年度からの学習指導要領改定や、2021年度からのGIGAスクール構想に伴うタブレットの配布により、これまでの学習の仕方が変化してきました。本日はタブレットを活用した新しい学習の取組や、その課題について知っていただけたらなと思っております。

発表の流れです。まず、昨年度の実践から見えた課題を最初にお示しし、その後、課題解決に向けての展望をお伝えしたいと思います。発表の中で実践と課題が行き来する場面もございますので、ご承知おきください。

昨年度、4年生は総合的な学習の時間に海のプラスチックごみ問題について取り組みました。そこで、みんなに海のプラスチックごみ問題を考えてもらうために、ポスター作りを行いました。こちらは実際に作成したポスターです。ポスターの見出しや色使い、レイアウトなど工夫して作成しました。こちらのポスターにはQRコードが張りつけてあります。QRコードとスライドをリンクさせており、海のプラスチックごみ問題について、より詳しく知ることができます。このQRコードやスライドのアイデアも、実際に子どもたちから出たアイデアです。QRコードとスライドをリンクさせる作業は教員が行ったんですが、子どもたち自らこのような取組を見つけることは、とても素晴らしいことだなと感じています。

まず、4年生の総合的な学習を始めるに当たり、葉山町長柄で好きなところや大切なものについて考えてもらいました。子どもたちの好きなものや大切なものを見ると、葉山牛、葉山コロッケなどの食べ物、げんべいやHAYAMASTATIONなどの場所、リスやカブトムシ、クワガタなどの自然や生き物、そして人などたくさんものが上がることができました。これらの好きなところや大切なものに優先順位をつけ、課題に結びつけました。

課題設定の手だてとしてタブレットを活用し、思考ツールを使って自分の考えを整理しました。こちらはレビングという思考ツールで、たくさん考えを出すときに使う思考ツールです。こちらはダイヤモンドチャートという思考ツールで、優先順位をつける際に使う思考ツールです。こちらはキャンディーチャートという思考ツールで、ある物事に対して見通しを持ったり、推論したりする際に使う思考ツールです。レビングでたくさん考えを出し、ダイヤモンドチャートで優先順位をつけ、キャンディーチャートで課題に結びつけました。このように思考ツールを使うことで、自分の頭の中で考えていることを視覚化し、整理することができます。

課題について整理し、全体でお互いの考えを共有した後、4年生の探究課題を設定しました。4年生では海のプラスチックごみ問題をテーマに活動することを決め、また目標として、葉山の海にあるプラスチックごみを減らすために自分たちにできることを考えようというねらいを決めました。

この探究課題を設定していく中で、1つ目の課題が見えました。それは探究課題設定の難しさです。1つ目は、教師側が一方向的に定めた課題を子どもたちに設定してしまったこと。実際、子どもたちから海の関心や課題などは、それほど多く挙げられませんでした。では、どうしてこのようなテーマになったかということ、教師側の思いがありました。教師側が、海が好きで、海のプラスチックごみ問題について関心があったことが理由に挙げられます。私自身、沖縄出身で、葉山の海に対する思いも強く持っています。そのため、学習の当初から海のプラスチックごみ問題に取り組んでいきたいという計画を練っていたことも理由にあります。

また、この前年度まで一色小学校に赴任していたこともあり、一色小学校の児童は海に対する関心が高い児童が多く見られました。しかし、実際長柄小の児童を見ると、それほど高くなく、葉山の中でも関心の差があることに驚きました。この経験から、葉山の中でも各学校、各児童、関心がそれぞれ違うことを実感し、一人一人の関心をこれから捉えていくことが大切だと感じました。

2つ目です。2つ目は、児童や学年の実態から離れた難しい課題になってしまったこと。海のプラスチックごみ問題は、子どもたちも耳にする社会問題です。しかし、様々なことが複雑に絡み合っている広く深い難しい問題だとも感じています。実際に子どもたちが学習を進めていく中で、情報を得ても理解できなかつたり、課題が広すぎて自分たち、自分事として捉えることが難しい児童も多くいました。また、4年生の実態として、取組が限られていたり、またその取組の成果を検証したり確認したりするのに難しいという現状もあり、このテーマは難しかったんじゃないかなと個人的に感じています。

3つ目です。3つ目は、学習の中で課題を見つけることの経験が浅かったことです。今どの教科の学習でも、自ら課題を見つける力が求められています。しかし、これまで子どもたちは教師から一方向的に課題を与えられていたせい、なかなか自分で課題を見つけることが難しい状況になっています。そのため、学習の中で、もっと知りたいという気持ちや、疑問を持つこと、また問いを持つことなどの経験を積み重ねていくことが必要なのではないかなと感じました。

これらの課題を踏まえて、探究課題の設定では、子どもたちに寄り添った課題設定、児童や学年の実態に合わせた課題の設定、課題発見力の積み上げの3つが大切

だと感じました。

実践に戻ります。次に、講師の方を招き、海のプラスチックごみ問題について学びました。実際に映像や具体物を通して学びました。こちらがその様子です。子どもたちからは、今、プラスチックごみが世界中で増えていることで、海が汚れてしまったり、海の生き物が死んでしまったりしていることを知ったという感想や、海のプラスチックごみ問題は知っていたけど、プラスチックごみは有害で、人間の体にも影響が出てくることを初めて知ったなどの感想が聞かれました。この講演会を通して、子どもたちの中で、海のプラスチックごみ問題に対する関心が少しずつ高まってきました。

そこで、子どもたちが疑問に思ったことや、もっと知りたいと思ったことを出し合い、それぞれグループをつくって調べる学習を行いました。その際にもタブレットを活用しました。これは子どもたちが調べてまとめたスライドです。このグループでは、マイクロプラスチックについている有害物質や、人間の体への影響について調べました。タブレットでは、思考ツールのピラミッドチャートを使い、知りたいことや調べる方法、役割について整理しました。また、必要な情報を得るため、インターネットを使ったり、調べたことをスライドにまとめたりします。そして最後に各グループでまとめたことをスライドにまとめて、分かったことを発表し合いました。

その後、子どもたちから実際に海に行き行って確かめたいという声が上がっていたので、逗子海岸にビーチクリーンを行いに行きました。本来は学習の初めの段階に行く予定でしたが、コロナが蔓延していた時期ということもあり、行くことができませんでした。しかし、順番が前後しても、子どもたちに行かせてあげたいという思いがありました。それは実際に行き行って体験することで、気づきや感じるということ。また、実際に体験することで自分事に落とし込めるということが挙げられます。こちらは実際にごみ拾いをしている写真です。子どもたちは楽しみながら、意欲的にごみ拾いを行っていました。また、マイクロプラスチックの実験も、このように行っております。子どもたちからは「先生、こんなにごみが落ちていたよ。」「何かよく分からないものが海に落ちているんだね。」「逗子海岸にもマイクロプラスチックがあるんだね。」など、様々な気づきを得ることができました。

集められたごみを確認していくと、金属類、ビニール類、ペットボトル類、瓶類、プラスチック類、紙類など、ほぼ全てのごみの種類が見つかりました。子どもたちの感想では、「こんなにごみが多いとは思わなかった。」「どうしてこんなに海に捨てられているんだろう。」という感想とともに、戸惑いや驚きを感じている児童

も多くいました。また、「海のごみの現状をいろんな人に伝えたほうがいいよね。」
「みんなにきれいに海を使ってほしいね。」など、自分たちができることについても意識が芽生えてきました。

その後、海のプラスチックごみを減らしていくために、自分たちにできることは何かについて考えました。ここでもタブレットを活用し、一人一人情報発信の方法を考えて伝え合いました。こちらは実際の授業の様子です。

(動画再生)

このように、グループごとに情報発信の方法について伝え合いました。この発表の際にも、自分が選んだ取組や理由、その思いについて整理し、整理した上で自分の考えを伝え合うことができました。お互いの考えを聞く中で、友達の考えを認めながらも、クラスとして行うのは何がよいのかというのを考えてみました。

そして、クラス全体でも考えを共有しました。情報発信として、劇や放送、チラシ、ポスター作りなどのアイデアが出てきました。みんなでクラスの考えを整理していく中で、伝わりやすい、広めやすい、取り組みやすいなどの理由から、クラスとしてポスター作りを行うことに決まりました。

ポスター作りを行うことに決まった後、ポスターのデザインを考えるために、共有ノートを活用しました。共有ノートとは、同じ画面でみんなが同時に編集できるノートです。共有ノートを使うことで、ポスターに入れたい言葉を考える人や、イラストや画像を考える人など、役割を分担して作業を効率よく進めることができました。実際に完成したポスターのデザインがこちらになります。このようにタブレットで整理し、まとめることで、工夫して表現することができました。

ここまでICTを活用していく中で、2つ目の課題が見えました。それはICT活用の時間や資源の確保です。大きく3つの課題が挙げられます。1つ目は、ICTスキルを習得するために多くの時間がかかり、ほかの学習活動の時間が短くなってしまったことです。実際、タブレットでまとめたものをもとに、グループで伝え合ったり話し合ったりする活動を予定していたのですが、時間がとれず、まとめるだけで終わってしまった学習活動もありました。ICTスキルを習得するために集中した時間も個別で確保していく必要があったと考えています。

2つ目は、ICTスキルを発達段階を考慮せずに早急に習得させようとしてしまったことです。ICTスキルは、タイピングから画像、写真・動画撮影、スライドや表、グラフのまとめ方など多岐にわたっております。また、発達段階によってできることとできないことがあります。それにもかかわらず、たくさんのスキルを身につけさせたいという思いから、学習を押し進めてしまう部分があったことは課題

に挙げられます。

3つ目は、ICTスキルを専門的に指導するのが難しかったことです。個人として研修や本などを通して学んでいるのですが、答えられない部分もたくさんありました。放課後に調べて後日伝えるのですが、そのときには子どもたちのモチベーションが下がっていて、そのときに伝えられたらよかったなと思うことがたくさんありました。また、タブレットを扱う学年が低いほど指導に時間がかかり、1つの時間で全員に指導するのが難しいということもありました。なので、そのため学習が遅れ、予定していた学習が計画どおりに進まないということもありました。

これらの課題を踏まえると、ICT活用の時間や資源の確保のために、ICTスキルを習得するための時間を確保したり、段階的に習得させたり、専門的に指導する人材を確保したりすることが必要だと感じました。

実践に戻ります。その後、ポスターを貼る場所を決める際にも、タブレットを活用しました。グーグルマップを使い、どこの誰に向けて貼るとよいかをグループで考えながら調べました。実際にお店や道周辺の状況を詳しく知りたいときにはストリートビューを使い、さらに詳しく調べています。子どもたちからは、「たくさんの人が集まるところに貼りたいね。」「海によく行く人たちがいるお店に貼りたいね。」などの声が聞かれました。そして、それぞれのグループが貼りたいお店や場所を整理し、クラス全体で伝え合いました。こちらは地域のほうに貼れなかった場合に学校に貼るということで、学校のほうも子どもたちに選ばせました。

こうして貼りたい場所を整理した後、教員側でそれぞれのお店に連絡を取り、貼るための許可をもらいました。連絡を取る中で、以前に貼らせてもらったことがある場所は、すぐに許可を得られましたが、新規の場所や、ほかのクラスが先に連絡しているところは、断られるところもありました。結果的に許可を頂き、これらの場所やお店にポスターを掲示させてもらうことができました。子どもたちも実際にお店や場所に行ってみて、掲示されている様子を見て、自分たちの取組の成果を感じていたようでした。しかし、ポスターが貼られたことで、どのような効果があったかどうかを検証することができなかったことは大変残念に思います。

ここで3つ目の課題が見えました。それは、実践のための資源の確保です。大きく3つの課題が挙げられます。1つ目は、どこにどんな人がいるかなど、地域人材の把握の難しさがあること。ポスターを掲示する際にも、長柄小とつながりのあるお店がすぐに把握できていれば、よりスムーズに掲示できていたのではないかと感じています。

2つ目は、地域連携のための時間が足りないこと。ポスターをお店に貼る際に、

教師が許可、確認を得るため、放課後に連絡を取らないといけなくなりました。また、貼りたいお店に断られたり、貼りたいお店が増えるほど連絡に時間がかかり、教師の負担が増えてきました。そのため、児童の活動増が教師の負担増につながっていきました。

3つ目は、地域人材と継続的に関わることが難しかったことです。これは、時間が足りないことも理由にありますが、学校側から地域人材にどこまで、どのように関わっていいのか、お願いの仕方について不安があったことも理由に挙げられます。

これらの課題を踏まえると、実践のための資源の確保のために、地域人材を把握できることや、地域連携のための時間の確保、継続的なつながりの構築が大事だと感じました。

実践に戻ります。また、他クラスでは長柄小のみんなに呼びかけたいという思いから、タブレットで動画を撮影しました。呼びかけや劇を通して、全校のみんなに海のプラスチックごみ問題についてのメッセージを送りました。こちらは実際の呼びかけの動画です。

(動画再生)

このように学校内でのポスター作りやポスター掲示、動画での呼びかけなどの活動を行うことができましたが、長柄小の学校内での活動にとどまってしまったことが課題に挙げられました。今後はもっとPRできる場を広げたり、様々な手段を使って活動の範囲を広げたりするなど、ICTを効果的に活用した発信の広げ方にも目を向けていけたらと思います。発信が広がることで、子どもたちのさらなる達成感や充実感につながっていくと感じました。

次に、実践から見えた課題の解決に向けてです。1つ目は、ICT技術向上のための人材確保とカリキュラム作成です。例として、まず、ICTに専門性のある人材を確保し、町内または各学校に配置します。専門性のある指導員がいることで、授業の中で担任と一緒にICTの扱い方を丁寧に教えてもらうことができます。また、ICTスキル習得のための9年間のカリキュラムを作成します。ICTスキルを習得するには、小学校から中学校までの縦の系統性が大切です。どの学年でどこまでICTスキルを習得するのか、指導内容を明確にして、小・中で共有していくことが大切になってくると思います。

2つ目は、小学校から中学校までを見据えた学びのつながりです。例として、主体的・協働的な学びの系統性のために、学年に応じた探究課題の洗い出しと整理を行います。それぞれの学年の実態を踏まえて、どの学年にどのような探究課題が適しているのかなど、系統性をもって整理していくことで、探究課題に段階的に取り

組むことができます。また、探究的な学習過程の段階的な習得を目指します。これから各教科などでも探究的な学習を通して、より深い学びが求められてきます。その上で、小学校低学年から探究的な学習を段階的に積み重ねていくことで、中学校ではより深い、深みのある探究学習が実現できると考えられます。そのために、小・中で探究学習の学習過程のモデルやカリキュラムを共同で作成する場をつくっていく必要があると思います。

3つ目はコミュニティ・スクールの積極的活用です。例として、学校運営協議会との連携を強化します。まず、教員と委員さんの関わる機会を積極的に設定し、教員が困っていることを伝えられる場をつくります。また、地域人材、教育資源のリスト化を行い、学校から地域の資源を見える化します。また、外部連携の橋渡しを行ってもらい、学校と地域をつながりやすくする環境をつくります。

最後に、学校を地域連携学習コミュニティの中心にすることで、学校を子どもも大人も共に学び合える多様な学習の場にしていけたらと思います。

まとめになります。これからの学校教育では、子どもたちが学校で身につけた力を総合的に活用し、社会の課題解決に生かしていく力が求められています。また、教育を一つの学校だけでなく、中学校や地域のコミュニティも含めて行うなど、広い視野で子どもたちの学びを支え、深めることが大切になっていきます。

その上で、長柄小として2つ取り組めることがあると思います。1つ目は、総合的な学習の時間で行うSDGsの取組です。SDGsに関わる社会の課題に目を向け、身につけた力を総合的に活用しながら課題解決に取り組むことで、実際に自分たちの力で社会を変えていくことができるという体験を段階的に積み重ねていきたいと思います。

2つ目は、中学校や地域との学習の連携です。様々な学習で中学生や地域の方から学びたいときにICTを活用してつながったり、実際に教えてもらったり、学び合ったりするなど、日常的につながれる環境をつくります。

私は現在、中核教員養成事業として、外国語教育指導者育成のため、神奈川大学に研修に行っております。この経験を経て、実現したい葉山の未来像があります。それは、小中一貫教育で育む外国語教育や、国際的な人材豊富な葉山町を通して、様々な人と関わることに喜びを感じる授業を行うこと、異文化について深く理解する学びの充実を実現していくことです。そして、葉山から世界に目を向けられる子どもたちを育てていきたいと考えております。

そめのために、私自身、日々の教育活動に精進し、より成長できたらと考えております。ご清聴ありがとうございました。

町 長) 水木先生ありがとうございました。4年生ですね。すごいですね、最近の4年生は。どうもありがとうございました。

引き続き、今度は中学校になりますけれども、南郷中学校の河野先生、同じように現場の取組でご報告をお願いいたします。

河野教諭) 南郷中学校社会科教員の河野紘典です。本日はよろしく申し上げます。本日は、私の社会科の授業を中心に、より探究的な授業を目指して、小中一貫教育を見据えたICTの活用と展望ということでお話しさせていただきたいと思います。

まず、本日の流れです。まず最初に、私自身のところで、大学院での探究型授業との出会いについてお話しさせていただきたいと思います。その後、実際に探究型の授業を現場に出てみての自分自身の悩みだったりということをお話しさせていただいて、その後、ICTも入ってきましたので、それも踏まえた上での現在の授業実践のことをご報告させていただいて、最後に今後の授業展望ということをお話しさせていただければと思います。よろしく申し上げます。

では、まず最初に、私自身の話で、大学院での探究型の授業との出会いということをお話しさせていただきます。私は教育実習で、よく昔から言われるトーク&チョークというような知識伝達型の授業実践をしました。母校でやらせてもらって、ことごとく失敗しまして、このまま現場に出るのはちょっと嫌だなというのが一番大きくて、今後どうしようかなというふうに思っていたときに、ちょうど朝日新聞の広告で福井大学教職大学院というところの広告がありまして、ここでもう一回勉強し直そうというふうに思いました。なぜこの大学を選んだかということ、進学してから私、福井大学の附属中学校というところでインターンシップを行うことができたんですけど、これが一番、私がこの学校を選んだ理由なんですけれども、インターンシップといいますが、週4日、実際に現場に行って、学年のほうに所属させてもらって、そこで一日、教員と同じように分掌をこなしていくということをやらせてもらいましたし、教育実習のときに指導教官というものがあると思うんですけども、同じように私の社会科のメンターというふうに1人の教員に2年間ずっとついて授業を見させてもらったりとか、実際に自分自身が授業実践したりとか、そういうことを学ばせてもらいました。この福井大学の教職大学院で探究型の授業というものに出会いました。福井大学附属中学校は、教科と総合的な学習の時間全てが探究型の授業を実践していました。

同様に、福井県は公立中学校の研究もすごく盛んで、どの学校も年1回は必ず研究発表をされていて、至るところで探究型の授業ということの発表を見たりとか、学ぶ機会というのはたくさんあって、私自身が今までの授業観を変えるきっかけに

なりました。

実際にですね、探究型の授業を私自身が現場に出てやっていこうというふうに思うときに、何が大事かなというふうに思ったときに、今までは知識伝達型の授業でしたので、1コマの授業の中で完結することが多かったんですけども、探究型の授業を考えていくときに、単元というふうな大きなくくりの中で構成する、構想するということがすごく大事なのと、あと私自身が今、実践中、最も大事だなと思うのは、単元を貫く問いだと思います。単元を貫く問いというのは何かというと、実際子どもたちに主体的に学習をさせるときに、子どもたちがどこに向かっていけばいいのかというところがはっきりとしないと、いろいろな方向に行ってしまうし、授業者の自分自身が生徒と授業をやっていくときに、何が大事なのかということが明確にならないと主体的な授業ができないなというふうに思っていて、なので単元を貫く問いというのは今も私は大事にしながら実践のほうをさせていただいています。

もう1個は、1年間というくくりだったり、中学校3年間というくくりであったり、あと小・中の9年間という長い視点でカリキュラムデザインというのをしているかないと、どうしても探究型の授業をやっていると授業時数がかかってしまうところもありますので、そういうふうに長い目でカリキュラムデザインすることが大事だなということを大学院のときに学びながら、じゃあ実際に現場に出ようというふうに思って出ました。

私、初任校は葉山中学校でした。実際に葉山中学校に出て、やってみようと思ったときに、挫折しました。できませんでした。探究型の授業に最初チャレンジしてみたんですけども、どうしても自分自身に自信がなくて、揺らぎながら途中でやめてしまって、知識伝達型の授業に戻るということになりました。

何でそういうふうになったかということ、まず1個目は、定期試験と入試というのを意識したときに、生徒に主体的な活動をしている中で、どうしてもまず試験範囲がすごい長いときと、すごい短いときというふうに、バランスがとれなくなってしまったということと、もう1個は、高校入試を意識していくときに、実際に子どもたち主体で学習を進めているんですけども、果たして本当にそれが子どもたちに学びとして保障されているのか、定着しているのかということが、私自身の中で悩みました。なので、こっちが教えていると、教えたなというふうなことで自分自身が安心するんですけど、実際子どもたちにじゃあどれだけ定着できているかということ考えたときに、探究よりも知識伝達のほうがという意識が少しあったので、まずそこで挫折しました。

もう1個は、継続性がなかったです。結局、自分だけでやっていく中で、2年目のときに学びづくりの研究発表をやらせてもらったんですけど、そのときはずっと知識伝達の授業でやって、そのときだけ探究というふうな感じでやったんですけど、どうしてもやっぱり継続性がなかったので、子どもたち自身もちよっといつもと違う学びだったので、うまくできなかつたというところもあります。

もう一つ、やっぱり探究型の授業をやっていくときに、子どもたちが探究的な学び方を知らない。浸透してない。自分だけやっても駄目で、学校全体でこうやっているかやってないかということも含めて、自分の中で探究的な授業を初任校のところで自分自身が自信なく実践できなかつたということがあります。

転機となったのは、今の南郷中学校に異動したときです。今はこんな感じで授業を、探究的な授業を積極的に取り入れています。全ての授業を探究的な学習でやっているわけではなくて、もちろん知識伝達の授業をするときもありますし、こういうふうに探究的な授業をするときもあります。そこを使い分けながらやらせてもらっています。

こういうふうに関心するときは、子どもたちにどんどん自分たちグループをつくってやらせてもらっています。こういうふうな感じで話し合ったりとかをしています。

私が探究的な授業実践を行うときに考えていることなんですけど、まず構想のところ、あえて1人でできない課題というのを設定します。4人から6人ぐらいのグループ形成で取り組めるかなというレベルで、課題を設定します。そうすると、絶対分担する作業が出てきますし、分担するということはそれを共有するということが生まれてくると思いますので、そういうふうな仕掛けをしながら、話し合っただけで結論を導き出して、最終的に発表するという、こういう一連のことを考えながら授業を構想します。実際この活動をやっていくときに、まずグループでやる、学習計画表というのを作らせます。そうすることによって、実際に自分が発表するまでの間に、自分たちはどういうことをやらなければいけないのかという見通しを持たせながら取り組むということと、あと仕事を分担するので、一人一人がお客様にならないで、責任を持って自分の担当になったところを調べたりとかするということができるようになってきます。

実際、主体的に取り組む中で、子どもたちは教科書とか資料集とか用語集とか、いろいろ駆使して調べて、自分の調べた分担があるので、それを実際に共有して、その上で、じゃあどういうふうな結論にしようかというふうに、グループの最終的な結論を導き出すという学習を中心に、探究的な授業をやらせてもらっています。

これが実際に昨年度行った実践の単元を貫く問いです。後ほどアフリカの貧困をどう救うというのと、葉山町をよりよくする政策提案という、この2つは紹介させていただきたいなというふうに思います。

じゃあ、南郷中学校に異動して、私がなぜ今、探究的な授業を積極的にできるようになったのかということ、まず一つ、先ほど述べたように、定期試験と入試のところの悩みは、まずはやっぱり経験年数は今年で私、10年目なんですけども、10年目になりましたので、カリキュラムデザインというのは自分なりにできるようになってきたかなというふうに思います。この単元は自分が短い中で知識伝達して、この単元はしっかりと長い時間確保して探究的な学習を取り組もうというふうに、強弱をつけるようにできます。

あともう1個、学びの保障というところで、ワークとかプリントとかを活用しながら、そこで子どもたちにしっかりと社会的事象のところの定着ということを意識してやるようになりました。今やっていて一番大きいのは、ICTが入ってきたことによる時間の捻出です。また後ほど紹介させていただきたいと思います。

あともう1個、自分だけの取組で苦しかったところもありましたが、同じ教科の先生が授業熱心だったということと、南郷中学校に異動してきたときに、ちょうど主体的・対話的な深い学びということが校内の研究テーマとなりましたので、学校を挙げてのところで探究的な授業というのを取り組むことができました。

そしてもう1個は、昨年度ICTが急に入ってきたので、先生たちも、これ、どうやって使うということがやっぱり課題で、自然と授業でこういうふうに使っているんだよねというふうな情報共有とかをしながら、いろいろと授業のことを先生同士で話し合うということが生まれてきました。

じゃあ、このICTが入ってきたことによって、私の授業の中でどういうふうな変化が出てきたか。まず、探究的な学習をするときに、一つ考えを共有する方法というのがすごく変わりました。今まで、じゃあ感想とか自分の考えたことを共有するって、どうやってやっていたかというと、発表し合う。これはもうオーソドックスなやり方なんですけれども、これをすると、じゃあ全員で発表しようと、36人全員で、1人1分で36分かかっちゃうんですね。じゃあ、それ時間かかるから班の中だけで共有しようということ、今度全員分聞けないという、この時間のジレンマを感じながらやっています。

じゃあ、ちょっと時間もつたいないから、違う方法を考えたときに、もう1個出てきたのが、記入したプリントを集めて、それを印刷して配布するという方法を考えました。これは、どうしてもその授業内で共有って、することができないので、

タイムリーじゃない。もう1個、やっぱり集めて切って貼るという作業が、どうしてもこちらの負担が大きかった。それがICTが入ってきたことによって、今これ、実際に共有しているところなんですけど、自分がワークシートに書いたものを写真に撮って、このロイロの提出箱というところに提出すると、自然とほかの子が何書いているのかということが一目で見ることができる。これを本当に時間の捻出として、すごく便利で、これのおかげでいろいろとほかにやることができてきました。

あともう1個の共有方法が、ホワイトボードとかで班で話し合うという方法をやっていたんですけど、今このタブレットが入ってきて、ロイロの共有ノートというのを活用したことによって、違う方法が出てきました。それちょっと動画のほうをお見せしたいと思います。

この動画を見る前に、手前のところ、タブレットのここ、この画面を見てほしいんですけど、これ今、学習内容は、日本が第二次世界大戦に参加することになったターニングポイントはどこかという題で、子どもたちが社会的事象の付箋を並び替えて、どれかなと話し合っている。これ、ホワイトボードの代わりにロイロの共有ノートなので、この手前の子、一切いじらないんですね。だけど、こっちの男の子がいじっているのが、ここに反映されるといのが見られるので、ちょっと見ていただきたいなというふうに思います。

(動画再生)

という感じで、ホワイトボードだと、どうしても一回消してとかいう作業をしたりとかしなければいけないんですけど、このロイロの共有ノートをすることによって、ピーピーピーと画面をさわらただけで作業をすることができて、よりスムーズに話し合い活動を進めることができます。

そして、今ご紹介したように、共有する時間をスマートにすることによって、ほかのことができるということと、もう1個、今回ロイロが入った、クロームブックが入ってきたことによって、より協働して作業するということができるようになりました。今まで、自分たちの結論を発表するというふうになったときに、パワーポイントを使って発表するか、ポスターを使って発表するかという方法を私は多くとってきました。ただ、どうしてもこれ、作業できる人が1人だけなんです。なので、実際ポスターを作っても、1人の子がペンを持って、もう1人の子が発表原稿を考えて、残り4人の子が手持ち無沙汰になったりとかいうふうなことが生まれていましたが、今回このグーグルスライドというふうなものを使って、今、私がこれ作っているのもグーグルスライドですけど、このグーグルスライドを使うと、共同編集者になれば同時進行で全員が作業することができる。なので、じゃあ僕このス

ライドのページ作るね。じゃあ私このスライドのページ作るねというふうに、同時進行ですることによって、手持ち無沙汰の子は出ないということと、あともう1個、教員が共同編集者になると、実際に机間指導していなくても、その場で私のクロームブックの中でどういうふうにそのグループが今、スライドを作りながらまとめているのかということ把握できますし、そこからコメントで伝えることもできますし、すぐその場に今、把握している状態で、ぱっと子どもたちのところに行って指導・助言できたりとかいうふうにすることができるようになってきました。

社会科教員として、このクロームブックが入ってきて一番大きかったのは、圧倒的な情報量が増えました。今まで、じゃあ社会での調べ活動でやろうとって用いていたものは、教科書、資料集、地図帳、用語集とかです。これじゃ足りないからというふうになったときには、図書館とか図書室とか行って調べてねというふうに言うんですけど、どうしてもやっぱりそこに子どもたちが足を運ぶことがなかったんですね。なので、使う資料というのがみんな大体同じなので、導き出す結論だったり、用いる資料の根拠だったりというのが、ほとんど同じで、あまり差異が生まれなくて、面白みがなかったというのが正直なところなんです。ただ、このクロームブックが入ってきたことによって、クロームブックを用いて昨年子どもたちがじゃあどんなのを使って調べたかと。国土地理院というところに行って地形図を実際に見てみたりとか、R I S A Sという経済産業省のホームページ、地域振興のデータのサイトを見てみたりとか、葉山町のホームページを見てみたり、そして分厚い、葉山町第四次総合計画というのもネット上にはPDFでアップしてあるので、それを見たりとか、本当にいろいろな根拠となる資料を集めるようになりました。

もう1個、去年から実際に使っていて出てきた、私の新しい発見だったのは、ネットの情報量の多さで、子どもたち調べ始めるときに、いきなり調べるとどうしても、何調べたらいいんだろうと悩んでいたんですけど、その結果、より教科書を読むようになりました。教科書を読んで、自分が何を今、知りたいのかということをはっきりとさせた上で、調べ活動に入っていくことができるようになってきました。

これは実際に葉山町のホームページにあるハザードマップを見ている様子です。これが今、調べ活動をやっているところなんですけど、見ていただきたいのは、この教科書なんです。タブレットと教科書併用して、タブレットは文房具として子どもたちは使いながら、教科書と見て、じゃあ、これ、タブレットで調べようみたいな感じで、今、ICTが入ったことによって授業の中で使う姿が見られていると。

そういうふうに、ICTが入ってきたことによって、私の授業の中でもいろいろと変化が出てきたんですけど、今後の授業展開の中で私が大事にしていきたいのは

何かなと思うとき、まずは学びを止めない授業の実現。そしてもう1個が小・中つながった学び、この2つを意識してやっていきたいなというふうに思います。

じゃあ、学びを止めない授業ってどういうことかという、今、私がプロジェクト型学習の探究学習を進める上で、子どもたちによく伝えるのが、家で個人でできることと学校で仲間とできることというのを意識して計画を作ろうというふうに伝えております。こういうふうにおうちで自分の家庭学習でできることを促すことを、今までもやってきました。でも、家で実際やると、次の授業の最初って、どうしても共有から始まるんですね。結局、じゃあみんなで調べようみたいな、非効率的な授業が、時間がかかっちゃうということが多かったんですけど、今回このタブレットが入ってきたことによって、先ほどご紹介した共有ノートというのがあれば、家で取り組んでいて、それを実際に事前に子どもたちが共有することができる。なので、授業を実際に自分がやっていて、子どもたちの中でも、「これはじゃあ僕、今日、家で調べておくから。」みたいなことを言っている姿が見られたりします。

もう1個驚きだったのが、学校に来て、ひたすら50分間話し合っているというグループも出てきます。家でこれ調べてきたから、これ、どうかなみたいな、ひたすら話し合い続けて、最終的に、「じゃあ、次のときまで僕これ調べてくるね。じゃあ解散。」みたいな感じで終わるというふうに、家と学校というのを傍観しながら学習を進めるという姿が見られるようになりました。

もうタブレットが子どもたちにとって文房具のように手軽に使えるようになってきているということがあります。これによって生徒がより一層学ぶという機会は、授業の中で学ぶだけじゃなくて、家でも学ぶということができるようになってきました。ただ、南郷中学校、Wi-Fi環境が弱いので、時々Wi-Fiが止まっちゃって、子どもたちが授業中に戸惑うみたいなことはあるんですけども、このタブレット入ってきたことによって、学校と家庭との授業、学びの傍観というのはすごいできるようになってきました。

あともう1個、このタブレットが入ってくることによって、さっきの学びの保障のところにもつながってくるんですけども、もしタブレットに個別学習を充実できるAIドリルみたいなものが入ってくると、より一層、自分たちの探究が深まりますし、個別で自分の今調べていて分からなかったこと何かなとか、確認したりとか、学びを振り返ったりとか、することができるようになってきて、より一層探究的な学習が深まっていくと思います。

もう1個、小・中つながった学びについて。私は先輩の学びの成果って、見ること、すごく大事だなというふうに思っています。それは学びの見通しというのを子

どもたちが持つことによって、自分、来年こんなことを勉強するのかなとか、自分たちが勉強してるのが、こういうところにつながっていくんだなという見通しを持ちながら取り組むことって、すごく大事だというふうに思っています。

その中で、いろいろ去年模索していく中で、昨年タブレットの中でグーグルサイトというのがあるんですね。それを使って、実際に教科のホームページというのを作ってみました。何でこれを作ったかという、ポスターとかは貼る場所と貼る時期というのが限られてくるんですね。どうしてもずっと貼りっ放しにすることができない。というのもあるって、あと学校がコロナで保護者の方が入ってこれないというのもあるって、成果物を見せたくても見せれないなということで、模索しながら出てきたのが、このグーグルサイトでした。ちょっとグーグルサイト、少し紹介したいなというふうに思います。

これが実際に作ってみたサイトです。これ、まだ一般公開していません。子どもたちが試験的に作ったんだよというふうに伝えながらやってみました。下にスクロールしていくと、先ほどご紹介した1年生はアフリカの貧困を救えという、アフリカ探検、成果物。2年生は、葉山町をよりよくする政策提案をしようという、地理分野の最後に身近な地域調査というのがあるんですけども、そのまとめの学習として載せてみました。

ちょっと2年生のほうを紹介させていただきたいんですけども、こんな感じで、この学びの足跡はもう私が書きました。この単元、2年生で地理の学習が終わるので、7つの地方をそれぞれ学習していくんですけども、社会科としては見方・考え方を大事にしているので、九州地方では自然環境に注目して、近畿地方では環境保全に注目してと、学習指導要領にのっとって、それぞれの地方でそれぞれの見方を学習しながら、じゃあ最後、葉山町を見てみようというふうにして、葉山町の政策提案をしようというふうにご考えてやりました。何で葉山町の政策提案をしようというふうにご考えたかという、ちょうど中高生議会が葉山町でやっていて、私も葉山中学校のときに生徒会担当で、それに関わることがあったので、そういうのをちょっとイメージしながら、できればなと思って、ちょっと作ってみました。

下にA、B、Cと、それぞれ部屋を作ってみて、ちょっと2Aの部屋をぽちっと押していただくと、下におりていくと、こういうふうにスライドを実際に子どもたちが作ったものが掲示されて、選択したら見れるようになっています。これ、葉山町のホームページで実際に政策提案しよう。これでも、実際その場でその子どもたちがプレゼンしてくれないと意味がないんですね。だから、どうしようかなといういろいろ考えていて、このスライドの中に音声入力ということができたので、音声を入れ

て、じゃあそうすると自分たちがいなくても実際にプレゼンができるねということで、1個この環境保全の両立というところを見ていただきたいんですけど、実際に音声マークを押すと音声流れ始める。

(動画再生)

という感じで、実際に子どもたちがタブレットで調べたデータ根拠をもとに、こういうふう到最后発表するというふうに、昨年作ってやってみました。このサイトに載っておけばずっとあるので、さっきお話しした貼っておく場所だったりとか貼っておく期間だったりとかを気にすることなく、サイト上に残すことができるということが、このグーグルサイトを用いたことになります。

じゃあ、何でこういうふうにこれが出てきたかという、私が学びの見通しとか大事なかなというふうに思ったかという、ちょっと後で紹介させていただくんですけど、私、福井にいたときに教科センター方式という校舎を見ていたので、これがイメージできます。あともう1個、小・中つながった学びで、先ほど水木先生のお話でもありましたが、小学校から探究的な授業を経験していたりとか、タブレットを活用していたりとかということができてくると、より一層充実した深い学びというところにつながってくるのかなというふうに思っています。

ちょっと話がそれてしましますが、先ほどご紹介した教科センター方式の校舎について、これ、福井県の福井市にある至民中学校という公立の中学校の校舎なんですけれども、社会科エリアとか理科エリアとか、こういうふうに関科のエリアをつくって、その教室に授業に行くというふうな校舎になっています。もうちょっと拡大してみると、こんな感じで、社会科のところは4つ、ホームというのは教室のことなんですけど、教室が用意されていて、子どもたちが社会の授業だからというふうに移動教室に来るというふうな校舎のつくりになっています。実際の写真が、これ、国語エリアの写真になりますけど、こういうふうに関1年生の成果物だったりとか、それ以外の学年の成果物だったりとか、そういうずっと掲示してあるので、これを見ることによって生徒が学びの見通しを持ちながら、じゃあ来年こういうことを勉強するのかとか。もう1個、これを貼っておくことによって、さっきのグーグルサイトも一緒なんですけど、先輩たちの各成果物を受けた上で、じゃあよりよい政策提案、何だろうとか、よりよいものは何だろうというふうに関継続して、学年を超えて継続して学びを深めるということができるようになってきます。

今、今日、探究的な授業について、ICTを活用した実践授業をお話しさせていただきましたが、改めて今回このお話しさせていただく機会をもとに関振り返っていくときに、なぜじゃあ探究的な授業を目指すのかということに関自分自身にもう一回

考えることができました。私自身、授業の中で、社会の授業のときに年号とか覚えなくていいよというふうに言うんですよ。年号を覚えたからといって、じゃあ何か人生変わるのかといたら、そうじゃなくて、大事なものは、社会的な見方、考え方です。今、子どもたちはタブレットがあれば調べたいことは調べて、それですぐ情報を、知識を得ることができるので、その知識をどう活用するのかということがやはり探究的な授業を行っていく上で大事だなと再確認することができました。

そういうふうに、実際自分の実践を裏づけていく上で考えたときに、まずは全校を挙げての研究体制が一つ大きかったです。私個人でやるのではなくて、学校全体で同じように主体的・対話的な深い学びという研究テーマのもとでやっていたので、いろいろな形の先生方の探究的な授業があって、子どもたちがいろいろな学び方ができて、私自身だけの取組にならなかったのが一つ大きかったです。

そしてもう1個、小・中一貫取り組むカリキュラムの可能性が見えてきて、私自身の中でもっとやってみようというふうな勇気になりました。葉山町の葉教研の社会科部会の中でも、小学校の先生の取組を共有したりすることができて、その中でもこの葉山という町の中でできる可能性というのを感じましたし、最後やっぱりICTが入ってきたことによって、新しい可能性というのをすごく感じました。先ほどもお話したように、時間の捻出がすごいできるようになってきましたし、子どもたちが根拠となる資料をたくさん集めることができるようになってきましたので、より一層自分自身もですけど、タブレットを使った授業を研究しながら、子どもたちと一緒に、より深い学びの授業実践ができればなということを改めて今回学ぶことができました。

以上になります。ありがとうございました。

町長) 河野先生、どうもありがとうございました。さて、先生からご報告いただきました。現場で行われているICTの教育の最先端のご報告だと思います。では、本件につきまして、まず委員の皆さんから、まず内容のご質問とか確認事項等ありませんか。ご意見もしあれば、お願いしたいと思います。

下位委員) 意見と質問を幾つかお願いいたします。ありがとうございました。非常に分かりやすく素晴らしいプレゼンでした。

まず水木先生なんですが、ICTスキルを専門的に指導するための人材の不足というお話が2か所に出てきたんですけども、これも現場の意見だと思うんですけども、ICT指導員はうまく活用できないんですか。

水木教諭) ICT支援員さんが学校に来られる際に、昨年度はかなり、初年度ということもあって、扱い方の部分でサポートしていただきました。2年目になってくると、

I C Tを活用している人と、活用してない人と、かなり分かれていまして、支援員さんがうまく使われていない現状もあるかと思います。I C T支援員さんが来られる日というのが、週1回とか限定されていまして、その際にタブレットを活用するときと、I C T支援員さんが来られるときとがなかなかマッチしてない部分も、もどかしいところなのかなと思っています。

下位委員) ありがとうございます。やはり時間数があまり多くないので、タイミングが合わない部分もあると思いますが、もしよろしければあらかじめ、次回こういっただけをやってほしいんだと伝えておいていただくといいかもしれません。事前に準備してくれたりすると思うので、週1回ではあるんですけども、効率よくお願いしていただけたらと思います。

あと、地域人材の把握の難しさという話が出てきましたが、プレゼンの中でも結論めいたこともありましたけれども、せっかくコミュニティ・スクールがこれから始まっていくので、今すぐは無理かもしれませんが、うまくそのあたりを使っていたら、今、南郷中がまず主体なんですかね。長柄小学校と共同で協議会されたと思うんですけども、恐らくコミュスクの構成員の中には地域の商店に詳しい人とかいらっしゃるの。そういう人にうまくお願いすると、ポスターを配ったりするときも簡単に話がまとまるんじゃないかなと思いました。

そして河野先生、1年間、3年間を見通した授業、私も同意するところではあるんですけども、なかなか担任、教科担当が変わっていくと難しいと思いますか。

河野教諭) 教科担当はもちろん変わってしまう場合もあるんですけども、授業をやっている中で、ここは3年生のときにまた出てくるだとか、ほかの単元のところで学び直すことができるなということが、こちらの中で見通しがあれば、必然的に今度年度変わるときに、引き継ぎのところでしっかり伝えておけば、問題なくできるのかなというふうに思います。なので、確かに教科担当が変わると、もちろんやり方も変わるところはあるんですけど、同じ教科同士で研究をやっている中で、それぞれの持ち味というか、大事にしているところがもちろんあるんですけども、共有しなければいけないところはもちろん共有しながらやっていけているので、そこはあまり問題はなくできるのかなというふうに思います。

下位委員) 分かりました。探究的な学習と知識伝達型の学習というお話が何回か出てきたと思うんですけど、今、文部科学省の指針では、探究的な学習のほうに進めていこうとしているわけなんですけど、なかなかやはり中学生だと高校受験の内容が変わってこないと難しい部分がありますか。例えば、今おっしゃっていた「いい国つくろう鎌倉幕府」みたいなことを覚えなくてもいいはずなのに、受験に出てくるから覚え

てなくてはいけない。そういった弊害というのがあるのですか。

河野教諭) いや、それはずっと悩んで、最初すごい悩んでいたんですけど、僕の中で今、授業実践をやっているのは、自分が立てた問いを、答えを導き出す上で、社会的事象が理解できてなかったら、そこに導き出せないなというふうに、そこを整理してあげて問いを設定しています。なので、鎌倉幕府の話でいくと、僕がやった実践、去年やった実践は、中世武家社会が確立したところはどこかという、ターニングポイントを決めようというふうな授業実践をしました。そうすると、平清盛が太政大臣になったときなのか、それとも鎌倉幕府が成立したときなのか、それとも守護地頭を置いたときなのかとか、いろいろな社会的事象を彼らは1個1個精査しながら、あ、これ、ここかなというふうに決めることになって、知識を活用できる問いをちゃんと設定してあげればいいのかなというふうに思っています。ただ、僕が毎回それをできているわけじゃないので、もちろんそこはいつも悩む、産む苦しみをしながら、これでやってみようみたいな感じでやって、うまくいかなかったなと思ったときは、もちろん自分の中で知識伝達になって、ここを押さえておこうかなというふうな感じでやっております。

下位委員) ありがとうございます。ちょうど今、過渡期なんですね、きっと。ぜひ頑張っていていただきたいと思います。

あとはICTのタブレットの実際的なところなんですけれども、圧倒的な情報収集でも、インターネットで調べていけるというのがあったと思います。今、クロームブックはフィルターをかけさせていただいているんですけど、そのフィルターのかかり具合がきつすぎるとか、逆に弱すぎるとかのご意見はありますか。また、子どもたちが授業中にユーチューブを見てしまうとか、リテラシー的な部分で何か感想ございますか。

河野教諭) 確かに、リテラシーのところは、授業をやるときに、別にNHKフォースクールとか彼らが見たりとかという話をしたり聞いたりとか、もちろんその必要なユーチューブを見たいとかは出てくる、場面が出てくるので、それは別に許可してますし、同様に、違うことをやったら、それは本来の学びと違うのでという、その都度その都度やはり伝えながら、彼らのリテラシー、モラルのところを育んでいこうと思って、机間指導していますし、あと圧倒的な情報量の多さの中で、僕自身が一番気をつけているのは、その資料の信憑性、根拠となり得る資料かどうかというところは、ブログから書いてあったからと子どもたちが持ってきたりするんですけど、そこは1人の人の意見だよなと。資料、データは絶対だけど、データの見方はそれぞれ人の違いが出てくるよなということは、絶えず1年生のときから伝えながら、タブレ

ットが入ってきたので、去年からはずっと、そこは何か机間指導していくときに、大事にしながらやってはいます。

下位委員) ありがとうございます。小学校のほうはいかがでしょうか。

水木教諭) 子どもたち、タブレットを使うということで、すごい楽しんでますし、喜びを感じているんですけども、扱いが慣れてくると、学習とは違った目的で使ったりする場面もあります。最初から、気をつけてほしいことと簡単に言うんですけど、実際に使っている中でリテラシーに反しているところだったり、あとは人を傷つけてしまったりということで、逆に使っている場合には、そのときに、しっかり子どもたちに考えさせて、指導するようにしています。

フィルターに関しては、たまにかかったりする部分もあるんですけども、やはり見れる範囲でまずは見ていくということが大切かなと思うので、検索のワードを変えたりしています。

下位委員) ありがとうございます。今回視察で学校に行かせていただいた中で、どこかの小学校のどこかのクラスで、後ろにタブレット禁止を解除を目指すというようなスローガンが貼ってありまして、休み時間に遊びで多分使っちゃった子がいて、休み時間は一切使うなという指令が、どうもそのクラスでは出ているのではないかと推測します。遊びには使わないからタブレットを使わせてくださいということを進めているようなクラスがありました。それは全然いいことだと思うんですけど。私が去年別の場所で聞いた話では、6年生の男の子が学校になかなか行けない、不登校気味だったんですけども、タブレットが入った。その子はパソコンが得意だったので、休み時間中に許可をもらってプログラムをやっていたんですね。そうしたら、ほかの子どもたちが、やり方教えてよって集まってきて、学校に行けるようになったという話がありました。もちろんそれが全てではないんですけども、そういう効果もあるタブレットだと思いますので、うまく活用していただけたらと思います。

最後に、すみません。中学校ではタブレットを持って帰ることを許可していらっしやると思うんですけども、先ほど河野先生のプレゼンにもありましたように、家でやってきて、学校でまたみんなでまとめていくという使い方があるとすると、生徒の皆さんの、ご自宅のネットワークの環境は大丈夫なんですか。

河野教諭) それこそ去年とか、オンライン授業をやっていて、そのときに確かにオンラインで、ご自宅のWi-Fiが落ちちゃうとかいう子がいたりはしましたが、オンライン授業を実際実施している中で、Wi-Fi環境が整ってなくてということはなく、実施することができたかなというふうには思っております。なので、家庭学習

でタブレットを使うということは問題ないのかなというふうに思います。

下位委員) 分かりました。Wi-Fiが弱い南郷中、葉中も弱かったですね。なんですけど、恐らく解消できる部分もあると思うので、ぜひ、なるべく多くの生徒が使うときに、私たちを呼んでいただければ、どこにボトルネックがあるのかという判断ができると思います。解決していきたいと思いますので、よろしくお願いします。すみません、長くなりました。

町長) ほかにいかがでしょうか。

小峰委員) 小峰です。水木先生、子どもに寄り添った課題設定の難しさをご苦労されたということはよく分かりました。簡単に言えば、先生の思いが強くて、そちらのほうに子どもたちを引っ張って行ったという形になってしまったけれど、それによく子どもたちがついて行って、子どもたちなりに、そこからポスター作りまで頑張ったということもよく分かりましたが、「が」なんです。

私、ICT教育の、もしかしたら陥ってしまいがちな活動というのが見られたかなと思ったのは、結局教室の中だけで完結してしまうポスターを作ることを選んでしまった、子どもたちが活動を足で稼がなかったということをすごく感じました。例えば、プラスチックごみについても葉山町として取り組んでいることってたくさんありますよね。だから、葉山町、自分の身近な葉山町ではプラスチックごみを減らすためにはどんなことをしているんだろう、海から遠い学校であっても、身の回りの中で自分たちは何が取り組めるんだろう、自分たちは何に取り組んでいるんだろうかというところに目を向けさせる方法もあったのかなと思います。町長がいらっしゃるのに私が言うのも何ですけれども、例えば葉山町の公的なところでは一切ペットボトルを使った飲み物を自販機などで提供しないとか、マイボトルを持って行ったとき、お水を自分たちで入れられる場所があったり、「クリーン葉山」で海岸の掃除をしたりそうしたことを含めていろいろな場面で葉山町としての活動をしていることを知るなど、それに参加するかどうか、自分たちの町でもこういうことをやっているんだということ、もうちょっと自分たちの力で誰かに聞いたり、親などにどんなことを知っているのかということを探ねてみたり、何かその辺に行き着くところもあると思ったんですね。そういう意味では、直接行動して調べて、みんなで情報を集める活動ができたのではないかという思いと、教室の中で終わってしまう授業になってしまったというのが、やっぱり一番怖い…怖いなというか、それだけでやった気になる学習では困るなということを感じました。

私が何が言いたいかというと、複線型になるような授業というのはお考えにならなかったのかなということです。例えば、ポスターを作るという子がいてもいいし、

自分たちができることにほかに何がないかとか、お店はどんなことをしているのかというように、プラスチックごみを削減するため、プラスチックごみの問題について、幾つかのコースを考える。そのときに、それぞれの課題でICTをうまく使うような方法がないかということをお聞きしたいです。いかがでしょうか。

水木教諭) 葉山町の取組を調べるというのは、参考になりました。取組、今回ポスター作りのみをクラス全体で行うことに決まったんですけれども、初めの取組としては、ちょっと自分でできる取組というものもたくさん出ました。ビニール袋を使わないとか出さない。あとはマイボトルを持つとか、あとは自分でごみ拾いを積極的に行うという自分のことや、あとはそれこそチラシ作り、ポスター作りと、たくさん出た中で、やはり総合の学習で大事なことが、みんなで共同で取り組んでいくということが大事かなと思っています。その上で、たくさん取組を設定してしまうと、やっぱり中途半端に終わってしまうんじゃないかとか、それぞれの取組が深まらないんじゃないかということで、どういうふうはこの取組を行うかというのが、すごく悩みました。

その中で、まずはポスター作りを全員で取り組んで、ポスター作りのためにどういうふうを考えて、よりよいものにしていくかというのを重点的にしまして、時間があればチラシとかその他の取組も行う予定だったんですけれども、時間的な余裕、あとは物理的になかなか広げられないということも、コロナの関係もあって、今回の1つに活動が収まってしまったことは、ちょっと課題でもあるかなと思います。

小峰委員) 分かりました。続けてよろしいですか。やっぱり私が一番残念だったのは、検証ができなかったと先生がおっしゃった、そこですよね。あるスパンで取り組んで、どれだけ自分たちの作成したポスターが効果を上げたのか、その効果を何で調べたらいいかということ、そこで子どもたちが変わる場面があるというのか、失敗だったら何が失敗だったのか、成功したとしたら、ここがよかったんだなという、自分自身の思いや行動が変わることが学習では必要だと思ったので、検証ができなかったということは、本当に残念だったなというふうに思います。

続けて中学校のほうでお伺いしたいんですけれども、具体的に小・中連携というか、できるカリキュラムというのは、先生のお考え方でどんなものがどんなふうに見えるというふうにお考えですか。

河野教諭) 中学校で教員やっていて、葉教研のときとかによく思っていたんですけど、小学校の先生とお話ししているときに、小学校の社会科と中学校の社会科というのは、両方とも社会的事象を様々な角度で捉えるという目的は変わらないんですけど、多

角的と多面的というところが違うのかなというふうに思っていて、小学校はいろんな人の立場で考える社会なんですよ。なので、消防士さんのお話とか、畑をやっていたら農業の方のお話とか、それぞれのいろんな立場の方の思いというのを彼らは学習しながら、中学校のほうに上がってくるんです。中学校は今度多面的になるので、政治的側面で捉えてみたり、経済的側面で捉えてみたりというふうに、またちょっと違う次元で捉えるということが小学校と中学校の社会科の違いなので、小学校のところで例えば人物の偉業だったりとかをよく授業されるんですけど、そのときに社会的事象を、こういうことを取り組んだだけじゃなくて、どういう思いで取り組まれたかとかいうところを小学校の先生がやってくださっていると、中学校のときに、同じ歴史上の人物が出てきたとしても、その人物が行ったことによって、どういう側面で社会に、社会的事象に影響を出したのかという、違う見方ができてくるので、そこが整理されていくと、より社会科としての深まりが出てくるのかなというふうに考えています。

小峰 委員) それは具体的に言えば、研究会に、小学校の社会科研究会、中学校の社会科研究会のつながりというのがきちっと定期的にできれば実現していくものなんじゃないかな。

河野 教諭) そうですね、何か私自身が葉教研の社会科部会を使ってやってみようと思って、一回試みてみたんですね。結果的に言うと、私が入院しちゃったので、その授業実践に行けなかったんですけど。ただ、何か指導案件と一緒にやったりとかしたのは、すごいよかったなというふうに思ってますし、あと実際に小学校の今でも覚えているのは、永楽屋さんの何かお話を聞こうみたいな授業をやってくださった先生のところの授業を見に行ったときに、僕は何となく中学校の社会科の公民の企業の社会的責任のところにつながるなと思いつつ捉えていて、小学校の先生はそこじゃなかったんで、そういうふうに意見を交換する、授業を見合って意見を交換するだけでも十分いいかなというふうに思いますし、葉山町だからこそこできるかなというふうに思いつつ、今思っています。

小峰 委員) 最後に、水木先生の一番最初のところで、今までの学校というのは、教師主導で、受動型の授業であったというふうにおっしゃったけれども、実は本当はそうではないはずですよ。いろいろな指導要領の変遷があつたけれども、その都度その都度、生きて働く力とか、いろいろな教師主導ではない授業、子どもを主体にした授業を進めていけるはずだったんだけど、やはり先生方が、こちらに目を向けてないまま今きてしまっている場面が多いということだと思つたんですね。だから、今ここでICT授業が入ってきたから、すごく大きな変化になると思つたんだけど、

お2人のようにね、それを積極的に使って、何とか探究型の授業をやるとか、子どもたちが主体的に課題を設定するような授業というのを志している先生のお気持ちがあれば、また変わると思うんですけども、そうじゃない先生にとっては、いろいろとタブレットは使っているけども、反対に言えばそれで先生に時間ができただけで、使わせていけば自然に子どもの何か成果が上がったような授業になってしまったら、それこそ主体的な学びに結びついていく授業にはならないと思うので、やはりお二人のような先生方が授業を変えていこうということを強く発信していただかないと、すべての先生方の授業も変わっていかないのかなということを最後に思いました。余計なことを言いましたけれども。

町長) 何かご意見ありますか。よろしいですか。

水木教諭) 教師主導型の授業、これまでお話したんですけど、教師主導の授業もこれまでどおり必要な部分もあるかと思います。それは子どもたちの見方とか考え方を育むためには、やはり子どもたちの中から生まれにくいこともあるので、指導の部分もあると思うんですが、そこだけではなくて、児童が主体的に学習を進めて、あと子どもたち同士で対話を深めて、子どもたちで学び合っていく、そのような学習がこれから中心になっていくと思っています。そのような授業をデザインするために、僕自身も各教科で頑張りますし、あとはそれを学校または地域の中でも共有して、学び方を広げていけたらいいかなと思っています。

町長) ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

清水委員) お2人の先生どうもありがとうございました。私は4月に就任したばかりで、GIGAスクール構想が始まった当初の状態は知らず、現在導入2年目で学校視察に伺い、児童の皆さんが使っているのを拝見しました。ICTという視点の今回の発表から気がついたのは、お2人の共通した意見でもある小学校・中学校が連携して学ぶことの重要性です。それをどのように葉山町が小中一貫校をつくってやっていくかということの具体的な案が必要だとわかりました。濱名課長が最初に述べてくださった9段階学習内容発表、キーボードによる文字の正確な入力とか、そういうスキル面のことが書いてありますが、スキルの取得は何が重要か。特に小学校における重要せいがお2人の発表で具体的にイメージできました。そしてICTのスキルだけではなくて、ディスカッション能力をどうやって学ぶか、それができないと、どれだけ便利なツールがあっても深い学び・探究につながらないということが非常に分かったので、グループで相談して、チームワークで考えていくこともICTと一緒に育んでいかなければいけないことなんだなというのが非常によく分認識できました。

なので、先生方がどういうふうにそれを、葉教研の中かもしれないんですけども、小中で連携し学びの目標を立てるかが重要だと思います。その点で水木先生の授業は目標イメージとして共有する良い材料だと思います。水木先生としては今、ご自分の授業に現在の4年生が中学に進級してスムーズに入るスキルがあるのか、学べる環境が今、葉山町の学校にあると思われるのか。こういうところを補強してくれば、きっとあの授業に役に立つ、そういった具体的なことがあるんでしょうか。

水木教諭) 昨年度4年生ということで、タブレット初年度で、子どもたちもタイピングの入力から始まりました。タブレット専用のタブレットというものを使って練習して、1学期の後半ぐらいからは大分みんな入力できるような状況になりました。そこから自分で考えたことをまとめたり整理したりすることができて、また2学期からは自分でスライドで表現してまとめたり、あとはそれをもとに、友達と話し合ったりすることもできました。ですので、初年度ということもあって、かなりICTに時間を使ったんですけども、他の学習、話し合うもので、小学校の段階から段階的にICTスキルを高めるのも大事ですし、その上で小学校に重ねていくことも必要かなと思います。なので、今の、小学生も十分中学校に適應していくんじゃないかなと思います。

清水委員) 水木先生のクラスだからということもあるのかなと。例えば南郷中はまだ今年度視察できてないんですけども、タブレットを活用した授業は始まったばかりなので、視察した際の葉中の児童だとかなりスキルに差がありました。何か指一本ですごい苦労してやっていたらっしゃる方がいる中、大変スムーズにできる児童もいました。文房具としてタブレットの使い方を教える（誰もがスムーズに使えるように）というのは非常に大事なのかなと思います。また、授業の中でグーグルサイトで作られた葉山町の政策提言などは、小学生や保護者が閲覧できたりすると、こういう学びを中学でするのか。であるならば、こういうふうに自分も学んでいったらいいんだなということが、すごく具体的に分かれると保護者の立場として思いました。グーグルサイトを小・中学校で共有していくことなど連携したり、授業評価が難しいかもしれませんが、そういった連携は河野先生考えられますでしょうか。

河野教諭) 小中連携のところで、1校、今年から南郷中学校と長柄小学校で総合的な学習の時間とかを一緒に研修会をやったりとかしているんですね。なので、そういうことを軸にしながら、まず全部の教科をホームページでやるのは大変だと思うんですけども、9年間の中で総合的な学習の時間のホームページを作るとかはできるかなというふうに思います。そうすると、じゃあ来年、それこそ9年目、中学校3年生のときにこういうことをやるんだなというふうなことをしながら、子どもたちが取

り組んでいくことができるのかなというふうに思います。

あと、さっきのお話聞いていて思ったのは、全然僕の授業がゴールだとは思ってはいないんですね。別に何かICTのスキル自体は、1年、2年で子どもたち自身は、今の3年生ではできてます。すごいできるようになりました。休み時間がすごい、タイピング、ガーッとやったりして、1本しか使ってなかった子たちがどんどんやったりとか。こっち使っている、使うようにやっていると、子どもたちは速く打てたほうが便利だなと思うからやると思うんですよ。スキル自体のところは、文房具なので、何とか、たくさん使っていけば何とかかなというふうに思うんですけど、実際に学び方のところがすごく大事かなと思って、さっき水木先生のお話の中にもあった課題を自分で発見する力というのは、なかなかできないと思うんですね。僕自身の授業も、教科の授業だから、一応何でだろうとか、発意を持たせるように仕掛けますけど、でもこっち主導でぽんと設定して、じゃあやってみようみたいな感じになっているので、実際に子どもたち自身が見いだす課題設定というのは、ほんとこれは経験だと思うので、小学校のときからやっていると、中学校の最後の3年生になったときに、より自分たちの課題設定が明確になりながら、実際に探究深めていくところの活動だったりとかが充実していくのかなと思うので、ICTスキルだけじゃなくて、学び方と、この小中連携が大事かなと思います。

清水委員) ありがとうございます。何かこう、どういうふうに考えていくのかというのが、すごくこの発表を通して見えたので、とてもありがたかったです。ありがとうございます。

町長) ありがとうございます。ほかにはいかがですか。

鈴木委員) このICTについて、多分お2人は、学校の中では非常に理解でき、調整ができる教員なんだと。発表がすばらしかった。見ていて、こういうふうに使っていくんだと、子どもたちにうまくやらせることができるかどうか勝負だと思っている。

僕は若干心配なのは、まず1つは先生の技量。お2人のようなものができる先生ばかりならいいんだけど、河野先生の社会を受けたいけど、A教師の社会は受けたくないになっちゃうわけですよ。極端に言うとな。教師の技量が非常に問われる。

それから、もう一つは子どもたちのほう。使い方については、河野先生が言うように慣れてくると思う。子どもは早いから。うちの孫なんか3歳から4歳でスマホをいじるぐらいだから、どんどんよくなっていくんだけど。それでも得手不得手がある。河野先生が要求するものを見せられたときに、どういうふうにそれを調べて、どういうふうにやるかという頭脳の問題。ついていきにくい子が出てくるはず。やっぱり、このICTも含めた、リモートもそうなんだけど、子どもたちの学力の差

が出てくるんじゃないか。今よりも大きく出てくるんじゃないかと、ちょっと心配している。

というのは、それに適応できる生徒さんと、全然できない生徒さん、それから教員のほうも、いつまでたっても全然適応できないやつが出てくるわけですよ。そういうためにはね、研修なり、まず教える側の教師の技量というものを要求される。なぜかといったら、今までやったことないんだから。もう20年やっているような先生は、まず慣れないよ。自分のやっていることがいいことだというふうに思っているから。その意識を変えるのには、納得してもらう時間が必要になる。

それから生徒のほうも、まだまだ2年目でね、先生よりも早く、はるかに早く覚えてくるだろうけど、河野先生が言うように、使い方が問題なんだろうと思う。どういうふうにこれを使ったら、自分にとって研究型になるのかということの意識を植えつけるまでには十分時間がない。僕は全体的に言いたいのは、ICTはやらなきゃいけないし、必要になってくる。機械の関係といえますか、コンピューターがこうなってるけど、学校における授業の仕方は、ここ何年かはかなり模索が必要だろうと。一番皆さんに頑張ってもらいたいと思うのは、子どもたちの差が出ないように。今でさえ対面の中でやっても、差が出てしまうわけですよ。今までのやり方でも。今回のICT、もっとできる子とできない子の差が開くんじゃないかということを心配している。開くとどうなるかという、いじめに遭ったりね、学校へ来たくなくなったりということが出てくるので、何とかその辺の負の部分というものをこれからできれば意識していただきたい。これは私の願いです。よろしく願いいたします。

水木教諭) 本当にICTはすぐに扱える児童もいれば、なかなか指導するのに時間が必要な児童がいるのは、そのとおりだと思います。学習は苦手だけれども、ICTを使うのは、タブレットを使うのは好きだとか、実はおうちでゲームしていて、タブレットの操作が上手だったりする子もいまして、僕は自分から指導することも多いんですけど、できた子どもからどんどん、できない子どもに教える、学び合うというのをたくさん進めています。これはICTに限らず、どの学習でもそうなんですけども、子どもが主役になって、子ども同士学び合うことで、より楽しく、より学びが深まるというふうに感じているので、やっぱり子どもたちをたくさん育てて、その輪を広げていけたらいいんじゃないかなと思います。

また、教員によってもICTに対する技術やモチベーションに差があるのは現実なんですけれども、昨年度も私が実践することで、興味があるから教えてほしいとか、これ、どういうふうにすればいい。そういうのは聞きに来る職員もたくさんい

たので、そういったものを共有する時間を今後はたくさんつくったり、あとはお互いの授業を見合ったりするなど、そういう環境を日常的につくっていったらいいかなというふうに思っています。

河野教諭) まず、学力差のところは、学びに向かうところで、子どもたちが内容に興味関心をこちらがどれだけ持たせられるかという、感じさせられるかが、僕は授業をやっている大事なところ。そこが勝負かなと思うんですね。本当にそれ知りたい、気になるとなったら、さっきお話ししたとおり、家でもどんどんやるし。どうしても、それこそペーパー試験での見えてくる学力差というか、その自己肯定感が低くなっちゃって、勉強に向かうのがちょっと落ちちゃう子どももちろんいるんですけど、でもこの、僕、探究のときに、あえてずっと共同にするのは、そういう子も含めて、自分が何か調べるのは苦手だけれども、まとめるのは得意だよとか、それぞれのよさがあると思うんですね。それを彼らが自分で自分のことを知りながら、他者に伝えながら、そこで自己肯定感を育てていけば、学びに向かうハードルが少しずつ下がって行って、どんどんどんどん学びに対して積極的になっていくのかなと思っているので、授業をつくる時にも、何かそこは大事にしていこうと。

僕自身も、じゃあ今回タブレットが入ってきたときに、一番大きかったのはタブレットが入ってくる前に、2か月間学校がコロナで休校したので、その2か月間、森岡校長に国研の評価基準というやつは読んでおけみたいなことを言われたんですね。僕自身が確かに教員になってから、ゆっくり自分のことを研鑽してなかったなと思って、そこでやったときに、改めて学習指導要領と国研の評価基準を読んでいたら、自分自身もっと勉強したいなというところが出てきて、ちょうどタブレットが入ってきて、もっとこれ使って、もっと楽しい授業をしたいなと思ったから、今こういうふうにいるいろいろな挑戦できているのかなというふうに思って、子どもも一緒に、子どももだからそれを知りたいなとか、もっとやりたいというふうに思わせれば、思ってくれば、どんどんどんどんその学力差は埋まっていくのかなというふうに思いますし、教員の差のところは、ICT支援員さんをどう活用という言い方がちょっと失礼かもしれないですけども、どううまく接していくかだと思うんですね。僕は去年、僕の授業を見てもらうよりも、僕自身の使い方をレクチャーしてもらったことのほうが多かったんですね。1人しかいらっしやらないし、1つの教室に行っちゃったら、残りの8つの教室は見れないので。だから僕は何か、こういうことをやりたいんですけど、どうしたらいいですかみたいな感じで、教えてもらってやっていたみたい。自分自身がほかの何かの分掌のときに、例えば今やっているのは3者面談の日程を、グーグルホームで集めてみようかと思って、あえ

て何かそれをやりたい担任の先生と、別に紙媒体で今までどおりでいいよみたいな先生をあえてこう何か、どっちでもいいように設定しながら、ちょっとずつちょっとずつ、何かそうやって発信してやっていければなと思いつつながら、多分、やっていくと絶対こっちのほうが何か魅力的に感じるし、便利だなということが先生たちの中でも伝わっていけば、もっとみんな活用していくのかなというふうに思いながら思っているので、やっぱり結局、気持ちのところ、無関心性だったりとかというところが、火がつけば皆さんやるのかなと思います。

鈴木委員) ありがとうございます。もう一つだけ。さっき下位委員の、フィルターかけているいろなところにかないでできるということが前提にあるんだけど、これは、先生方には非常に言いにくいんだけど、性善説に立たないように。要するに、性善説に立って物を考えたら、絶対駄目。これは行くことを前提に。そうなったらどうするかという、下位委員が言われたようなこともね、性善説に立って、やらないだろうという考え方は駄目。やるだろうということを前提に、どう考えるか。そのことを頭の中に入れて。ここから先入らないでくださいとよく小学校なんかを立て札があって、縄が張ってあって、ここから先は危ないから入らないでね。これ、性善説に立った人のやり方。前に葉小のことで言ったのは、物理的に入らないようにしろと言ったんですよ。そこを考えてほしい。できるだけ性善説に立つというのは日本人のいいところでね、大事なことなんだけど、今の時代、それは無理ということの基本を考えていただきたい。ぜひその辺も、非常に危険が伴うということを踏まえて、それをお願い。

下位委員) 1つ補足させていただいていいですか。フィルターをかいくぐる方法を見つける子どもがやっぱりいまして、去年1箇所ふさぎました。この方法が中学校で発見され、うわさになって、それが小学校に伝わったような現象がありましたので、そういう情報があったら、ぜひ教えていただきたいと思います。

町長) 他に。

教育長) お2人ともご苦労さまでした。いずれにしても、お2人はよく分かっているんだと思うんですけども、文科省はね、スタートラインでは、アクティブラーニングという物の言い方をしていたんです。ところが、アクティブラーニングというのを非常に推進する一定の学識者が出てきたんですけども、それはどこに走ったかという、今日先生たちがおっしゃったとおりで、どちらかという、テクニカルな部分を一生懸命やることで、教育の本線じゃない方向に行ってしまった。これを文科が反省したので、主体的・対話的で深い学びという言い方に変えたんです。

つまり、何かという、もともとアメリカでアクティブラーニングがスタートし

た段階においても、重要だったのが主体的に学ぶ姿勢だったんですね。それをアクティブラーニングと言ったわけです。アクティブラーニングというのは、根本的に何の話かという、学習をさせていくときに、問いを仮に先生たちが一旦大きな、先生たちが大きな問いを投げたとしましょう。そうしたら、そのときに、自分たちでそれをさらにどうしていこうかなというふうに、目の前にいる学生たち、児童・生徒たちがみんな一緒に頭の中でどうしようかなと、頭を動かさせてやるということがアクティブラーニングであって、主体的で対話的な深い学びにつながっていくということは、多分お2人はよく分かっていると思います。

重要なところは、実はそこだけであって、情報教育の根幹はPC教育じゃないんですよ。パソコン使わなくても情報教育はいくらでもできるはずなんです。いわゆるそれはアルゴリズムの話もそうだし、プロトコルの話もそうだけれども、全て実はPCを使わなくてもいくらでもできる。だからこそ、お2人は今日の発表ですばらしかったのは、いつも教育委員の皆さんにもお話しをしているんだけど、失敗をしたことというのが非常に授業の中で先生たちがしっかり学んでいらっしやるのがやっぱりすばらしいことであって、失敗をしないことを教員は一生懸命これまでやり続けてきたわけですよ。失敗するとみっともないという考え方が教員の中にはどこかにずっとあるんです。

これは何に対してかという、1つは保護者の方々からのリアクション、もう一つは目の前にいる児童・生徒たちが自分に対して何かよくない物の考え方をしてくるんじゃないかという考え方。もう一つは、周辺にいる教員たちが自分に対して何か違うことを実は思っているんじゃないかという、すごくどちらかという、ある意味ではよくない同調圧力系というのが教員の職場の中には存在をかつてはしていたはずなんです。僕らが教員になったときには、非常にそういうところを考えながら、だからこそ何とかしなきゃいけないという思いの中で教員をしてきた人間がたくさんいるはずなんです。なんだけれども、これから先の教育は、やっぱり先生たちもそれを露呈していくというのかな、一つ一つの部分をしくじっちゃったことって、いっぱいあるでしょうという話を、やっぱり子どもたちにしてあげることで、彼らは安心をしたいと思います。多分そういう経験談をお2人は持っているんじゃないかな。例えば子どもに相談をされたときに、ただ相談に乗って、高飛車のところから正当理論をかけても、子どもたちは安心しないですよ。確実にそれをしっかりとまずは聞いてやって、その子の現状を理解してやって、自分だって若いときはねという話だとか、いろんな具体例を話してやると、子どもたちは目の前に鏡がないから、自分がどんな表情をしているかは、自分たちでは分かってないです。でも、

先生たちは目を見てしゃべっているから、その子たちの表情がころっと変わったりすることを、多分経験として見ていることがあると思います。

それと同じように、授業をしていくって、多分そういうことなんだろうと思っているんですね。その中のところで、今日様々なところでご意見を頂いたところは、しっかりと受け止めていただきながら、その中のところで、さあ次は何しようかなというの、今日は一つの、もう一個のスタートラインであるべきだと思っているんです。

そこをしっかりと考えていく中で、今日いっぱいいろんなことが出てきたけれども、例えばディスカッション能力はやっぱりつけるべきだよねという話が出てきました。ディスカッション能力は絶対に必要だと思います。これは小学校の1年生からできないわけでは僕はないと思っています、小学校のディスカッション能力と、それから中学校のディスカッション能力は、きっと異なると。何でかという、社会経験の広さだけかなという気がしているんですね。それはきっとすごく重要。

それからもう一つは、対社会に対して、先生たちが自分たちの意識を持って、今のようないわゆる課題解決型のPBLの学習を進めていったときに、社会に対して何をもちて私たちの教育は間違っていないと言えるかというところの部分は、これまでの知識・技能型の間接テストや期末テストでははかれないんですよ。じゃあ、どうやってはかっていくのというところは、出口理論のある中学校の先生たちは、同時にそこを鍛えてあげながら、どうやって思考が違う形になっていったのかという、もう一つの定点観測を多分つくらない限りは、恐らくは周りが納得してくれないかな。そこをみんなはどう考えていくのか。これはもしかしたら評価基準の中でのルーブリックの作成なのかもしれません。ルーブリックを全員が理解するということが難しいかという、実はそんなに難しい話ではないので、みんなでそこは先生たちが少しずつやっていくことは重要なんだろうなというふうに思っています。

それから、今日、両方の先生方の発表の中で、やっぱり委員の方々が、グーグルサイトの話もそうだし、もう一つの水木先生が出してくれた子どもたちの発表のやつ、あれもやっぱりみんな見たいんだね、やっぱりね。だとすれば、これは、これこそテクニカルな話ではあるけれども、実にこれも大した話ではないので、どこまでのところに公開すべきかというところを明確にしながら、公開することは保護者ラインだったらできるんだろうと思います。ここは相談をしながら、学校教育課と考えれば、すぐにオープンは可能でしょう。ユーチューブもご承知のとおりで、いわゆる技術的には非公開的なこともできるし、限定の公開もできるということは、もうご承知だと思うので、その辺もどうやってやっていくかというのは、また一緒

に考えられるといいなというふうに思っておりました。

いずれにしても、何回も申し上げますけれども、情報教育あるいは探究型の教育、アクティブラーニング、主体的・対話的で深い学びというものは、PCのスキル教育ではないということは、やっぱりこれはぜひぜひ話を先生方が広めるときに、みんなが分かってほしいときに、ベテランの人間はパソコンは教えられないんじゃないかという話のところで、そこでストップにならない方策をどう考えるか、すごく重要です。誰かがやってあげればいいんじゃないのというのが一番簡単な方策です。河野先生がおっしゃっていましたが、私、こういう授業をやりたいんだけど、どうすればいいですかというのを、誰がそこをレクチャーしてあげるのかというのは、ICT支援員さんができるならすればいいし、こんな授業をしてみたいんですということできない人たちがやれば、それで教えてあげればいいし、サポートに入ってあげればいいというだけのことで、もしかするとあっという間に解決するのかもしれない。ですから、そのところは皆さんの中で考えていただけると、すごくありがたいなということ。

それから、キーボードの打てる、打てないに関してのところは、みんなで練習をしようね。これはすごく面白くていいことだし、みんなどんどん上達すると思います。ただ、残念ながら、その技術に関して、ある一定の能力の凹凸の関係でできない子もいます。なので、そこはしっかりと担任として見きわめてあげて、キーボードじゃなければ別に書けばいいだけじゃないですか。それだけの話なんです。それができればそれでいいと思います。僕はふだん使っているこれを使うときは、これも使うけれども、普通に書いて完全に変換していっちゃうことは、いくらでもできるわけだから、そのことも含めて、それもいいんだよという考え方を教員サイドは持つべきだなというふうに思っています。ぜひ今後とも頑張っていただければありがたいと思っています。非常にいい発表でした。ありがとうございました。

町長) ありがとうございます。他に何かありますでしょうか。よろしいですか。

大分時間もたってしまいましたので、本協議案件につきましては以上になりますけれども、私のほうからはですね、まさに今日は専門職の方の専門的な内容だったというふうに思っております。一般人として言わせていただくと、タブレットを渡して、タブレットをこう使うんだよという授業をしたりとか、今までの授業を、オンラインでなくなった後にどうしたらいいかということをやっているのかなとふわっと考えていたものですね、これほどディープに、新しい仕事として先生にまた負担が増えたんじゃないかと、すごい心配をしながら今日は聞いておりました。本当にこれほど使いこなしていただいて、また先を見ていただいて、生徒間でもそう

だし、職員間でもいろんな距離が広がっているんだろうなと心配もありますけれども、皆さんがぜひリーダーとなって引っ張っていただければと思いましたし、こういう方がいらっしゃる、お2人がいらっしゃることは、多分教育の希望だなと思いつつ、今日は見ておりました。すばらしいプレゼンありがとうございました。

途中、水木先生でしたか、地域の方とのつながりが難しいとか、課題を探すのが大変難しいという話がありましたけれども、葉山町ならではだと思ふんですけど、私も含めてですね、葉山の人間はほぼみんなが学校が困っているという、駆けつけると思っています。議会も、教育のためですという、議会は全会一致にすぐなるんです。面白いですね、これは。なので、もちろんそれぞれ駆けつけた分、いろいろなことを言うんですけども、それこそ、これから教育の世界に必要な力だし、先ほど河野さんが、お言葉ですがとあって、支援員を使うと言いましたけれども、いいんだと思います。町民の方を使って、町民の方も、私たちもそうですけれども、使われることで自分たちがいる意味を感じる時代だと思いますから、ぜひ学校の方々の課題を私たちにぶつけてくれて、その中で私たちが提案をしたり。一つ言わせていただくと、葉山の空き家の数は多くないんです。なので、あの展開は間違っていると。非常に少ないという実態が分かってきつつあります。そういうこともお伝えした上で、授業に臨んでいただくこともできると思います。いくら答えが見えない時代とはいえ、一定の答えを認識した上で、皆さんがその先を進めていくことが一番いいことだと思いますので。ぜひ本当に私たちに気兼ねなく使ってもらいたいと思います。

とはいえ、実は今日、校長先生もいらっしゃっているんで、難しいんだろうと思っています、以前から。ほかとの関わりを持つということが。スポットではできるかもしれないんですけども。例えば葉山ではないんですけど、以前ある高校の部活の先生が、生徒さん七、八十人連れて、町にSDGsの活動に来てくれたんです。私、その先生といろいろと話をして、すごく勢いのある先生で、学校に来て町の取組の話をしてくださいよとあって、わあっと盛り上がったんですが、その後、その先生の取組なので、学校としてはというのがどうしてもあります。葉山の学校でも、もしかしたらそういう思いになるのが、当然先生たちの考え方にあるのかもしれませんが。ですけれども、もし乗り越えられるものであれば、ご迷惑はかけませんし、申し上げたように私たちは貢献したい、協力したいという気持ちが一番でありますから、何か自分の満足のために行くわけではないということを前提に、ぜひ門戸を開いた学校であっていただきたいですし、葉山ならではだからこそできると思いますので、ぜひお互いに信頼を持ち合ってくださいね、子どもたちのためにやっていき

いなと思います。

皆さん、今日は本当に、大変高度な、そして私としては不勉強で申し訳ないなと思いつながら学びをいただきました。貴重な時間をいただきまして、本当に2人の先生には、いいプレゼンをありがとうございました。

では、案件としましては(2)その他がございますけれども、皆様から特に、よろしいでしょうか。

それでは、協議事項、2番目につきましても以上で終了とさせていただきます。

それでは、閉会となりますので、事務局のほうにお返しをしたいと思います。

教育部長) それでは、以上をもちまして令和4年度第1回葉山町総合教育会議を閉会いたします。次回日程は決まり次第ご連絡差し上げます。

時刻は16時11分でございます。お疲れさまでした。